

沿革と抱負

応用統計学会、日本計算機統計学会、日本計量生物学会、日本行動計量学会、日本統計学会、そして日本分類学会から成る統計関連学会連合が2005年2月4日に成立した。この直接の契起は、2001年5月に招集された統計関連学会連合大会連絡委員会であるが、それ以前より日本学術会議統計学研究連絡委員会(統研連)の活動、複数の学会による年次大会同時開催、統計数理研究所(統数研)50周年を記念した統数研、統研連、応用統計学会、計量生物学会による統計科学合同研究集会(1994年)等多くの協調活動がある。とくに、応用統計学会と計量生物学会は1995年に統計関連学会連絡委員会(2学会の連絡委員会ではあるが、将来の拡大を意識し、意図的にこの名称を採用した)を設立し、以来2001年までその覚書に従ってプログラム・予稿集を一本化した共同年会を開催している。

統計関連学会連合大会連絡委員会には統計学会、応用統計学会、計量生物学会が正式に参加したが、分類学会、計算機統計学会、行動計量学会への呼び掛けも行われた。その結果、第1回連合大会が参加3学会主権、分類学会協賛の下に、2002年明星大において開催された。その直後、連合大会連絡委員会は、連合大会を越えて協調を図るため、統計関連学会連絡委員会と名称変更し、分類学会、計算機統計学会、行動計量学会の参加も得たが、主たる活動は連合大会開催であり、第2回連合大会(2003年、名城大)、第3回連合大会(2004年、富士大)、第4回連合大会(2005年、広島プリンスホテル)を成功裡に行っている。

この間、統計科学の広がりを目指し、協調をより強固にするための組織化の声が強まり、冒頭の6学会により連合組織が正式に発足した次第である。現在、各学会代表2名(計12名)から成る理事会、代表1名(計6名)から成る事業検討委員会、同じくジャーナル検討委員会が置かれ、連合大会を越える様々な共同事業の可能性を議論している。統計科学の対象は社会全体であり、社会の変革に素早く対応して統計科学がその存在感を示すには、個別の学会が別個に対応するより連合が組織的に対応するのが有利に思える。これは学会に留まらず、統計関連研究所、政府統計関連部局等の活動とも関係する。そもそも、統計科学の諸分野に明確な境界線は見当たらない。連合大会も様々な関連分野の人、話題に触れられる利点に疑いは無いものの、一方、個別学会の独自性を強調する声も聞かれる。これをどう両立させ、発展させていくかは今後経験を積みながら探っていくことになる。今後も会員相互の連携を密にし、統計科学発展へ寄与する活動を続けるため、ご意見ご支援をお願いする次第である。